

2023.1.19



地域日本語支援ニュース こだま 第 427 号

ともに生きる

～地域で、日本で、そして世界で～

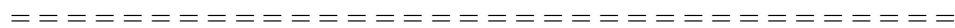


★—— メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。——★

【地域日本語支援ニュース 「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。

★—— 皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。——★

編集部：<https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.html>



■ともに生きる：和歌山県和歌山市から■

インドネシア出身のアバスタリさんは、2001年10月、東京の大学院に留学のため来日し、卒業後は日本企業に就職して、今は和歌山市内で家族5人の生活を送られています。

3人のお子さんは関西弁ペラペラだそうです。就職から現在に至るまでを振り返り、その道の手紙を書いていただきました。



新しい環境で生きる

アバスタリ

◆入社して群馬へ赴任

入社してすぐ赴任したのは群馬です。日本語は不自由ないと思っていたのですが、いざ入社してみると、わからないことだらけで、所属した部署では外国の社員が自分しかおらず、職場の環境や仕事の文化・考え方になじめるかどうか

か不安でした。私は職場のメンバーとのコミュニケーションが大切だと思い、まず1日で部署のメンバーの顔と名前を覚え、1週間で関係部門のメンバーの名前を覚えることを目標としました。また、毎朝早めに会社に行って、必ず部署のメンバーに挨拶しました。すると、結果は上々、コミュニケーションが取りやすくなりました。

入社当時は、製品の設計開発の仕事を担当し、専門用語、会社のルール、規制・規格、技術報告書・特許内容の書き方など、覚えることが山のようにありました。私は恥ずかしさを捨て、わからないことはすぐ周りに聞き、メモを取って週末にその内容を復習し、これらは解決していきました。

それでも、他部門とくに製造部門の従業員は、標準語を話さない人が多く、言葉の壁でトラブルがよくありました。メールや電話だけではいけないとその時気付きました。それからは、担当者に直接会って話すことを大切にしました。言葉で伝えきれない内容は絵やスケッチなどで説明することも心掛けました。おかげで、仕事が効率的にスムーズに進むようになりました。

◆結婚そして、転勤で和歌山へ

2011年に結婚して和歌山市に引っ越しました。当時、市内にはインドネシア人の人口が少なく(約80~90人)インドネシア人のコミュニティもなく、日常生活ではほぼ会う機会もありませんでした。

結婚で初めて日本に来た妻は日本語も話せず、市内にインドネシア人の友達もいないため、困ることがたくさんありました。もっとも大変だったのは食べ物のことです。私たちはイスラム教徒で、食べ物や飲み物に注意する必要があります。ハラール認証(注1)された物であれば問題ないのですが、日本では毎回買い物の時、例えば、豚肉、チキンエキス、ビーフコンソメ、ラード、ゼラチンなどを一つひとつ確認する必要があったのです。最近では、ハラール認証に対応するスーパーやオンラインショップが増え、買い物がずいぶん便利になってきました。

◆妻の日本語学習

妻は今までと違った環境に入ることに最初不安がありましたが、人生のチャレンジ、人生の勉強と心に決め、日々の生活を頑張りました。まず、日本語を話せること及び日本の文化を理解することを第一目標としました。日常会話レベルを1年以内で話せることを目標とし、日本語のショートコースや国際交流会に参加しました。日本語のショートコースは和歌山市に住んでいる外国人市

民のための日本語教室です。このショートコースでは、週1回日本語の会話や読み書き、日本文化を学びました。国際交流会ではいろんな国からの人々と交流できて、日本での生活についてお互いの経験の話もでき、妻は自分が一人じゃないと実感し、日々の頑張りのモチベーションになったと言っています。インドネシア好き日本人、インドネシアに滞在経験がある日本人、インドネシア人と結婚した日本人とも出会って、いろいろ教えてもらい、少しずつ日本語を話せるようになりました。

◆出産と子育て

2012年に長男が生まれました。周囲に知り合いや家族もない環境で初めての子育てで、わからないことだらけの状態でした。そこで、私と妻は自分たちだけで悩んでいてはだめだと思い、相談できる窓口をネットで調べました。市役所に相談し、そこから保健センターの保育士を紹介してもらい、電話での相談や、定期的に自宅の訪問などの対応をしてもらうことができました。さらには、ファミリーサポート（子育て援助活動支援事業）（注2）や地域の子育ての支援団体へもつながることができました。

長男の幼稚園入園では給食のことで相談が必要でした。イスラム教は食品に注意が必要なことを園長に理解してもらいました。毎月幼稚園の1カ月分の給食メニューと詳細な献立表を提示してもらい、妻はできる限りそのメニューと似たような料理を作り、長男に弁当を持たせるようにしたのです。幼稚園で弁当を担任の先生に渡して、給食時間に幼稚園の給食と一緒に出してもらうようにすることで、差別なく日本人の子どもと同じように扱われることになり、給食の問題を解決することができました。妻は初めて仲良しのママ友達ができて、幼稚園の連絡情報や習い事情報などのやり取りができ、子育ても楽しくなっていたようです。

長男が小学校へ入学する時も、再び給食について学校に相談しました。学校では食物アレルギーの児童生徒への対応もあり、宗教的配慮を要する児童生徒の給食対応についても問題ないと言われ、ほっとしました。幼稚園の時と同じ扱いで毎月献立表を提示してもらい、弁当を持参しています。

◆これからも私たちは...

在留外国人として、これまで、いろんな問題やトラブルなどがありましたが、私と妻はお互いに力を合わせて一つひとつの壁を乗り越えてきたと思います。大切にしてきたことは、問題が起きたら、自分たちだけで悩まず、早めに相談

できる相談窓口や仲良しの友達などに相談することです。これからも日本での生活と子育てを楽しみにしていきたいと思います。

(注1) ハラル認証は簡単に言えば、「イスラム教で禁じられているもの」すなわち「ハラームなもの」が、製品やサービスに含まれていないことを客観的な証拠をもって確認し、認証する仕組みです。

(注2) 子育て援助活動支援事業（ファミリー・サポート・センター事業）は、乳幼児や小学生等の児童を持つ子育て中の人を会員として、児童の預かりの援助を受けることを希望する人と援助することを希望する人との相互援助活動をサポートする事業です。
